

モノに執着しないという幻想

—モンゴルの遊牧世界におけるモノをめぐる攻防—

堀田あゆみ

総合研究大学院大学 文化科学研究科 地域文化学専攻

本稿では、必要最低限のモノだけで暮らしモノに執着しないといったモンゴルの遊牧民に対する言説によらず、現地調査によって得られた知見をもとに、彼らのモノをめぐる世界を明らかにする。遊牧が盛んなアルハンガイ県において、遊牧民の生活世界にあるモノの悉皆調査を行った結果、一世帯に373品目1539点のモノが存在していることがわかった。特徴的なのは、譲渡や貸借によってモノが生活圏を越え頻繁に移動することである。

とりわけ貸借は広く行われておりその対象も多様である。所有者から得た利用権によって借り手は自由に使用できる。廃棄や第三者への譲渡は許されないが、利用が終了しても所有者が取りにくるまで手元に留め置いておかまわらない。なぜなら遊牧民にとって、モノの所有とは占有を意味しないからである。切迫した必要がなければ手元に無くてもよく、入用の際に返却を求めるか、別の家から拝借すればよいと考えるのである。

しかし、常に気前よく要求に応じるわけではなく、譲渡や貸借をめぐる熾烈な駆け引きが展開される。所有者も要求者も様々な交渉を用いて自己主張を行う。所有者による要求の拒否はいずれ我が身に跳ね返るというリスクを伴うため、交渉で妥協点を探りあうことが重視される。また、社会関係を損なわずに交渉を有利にすすめるための戦略として情報管理が行われる。その一つが隠蔽工作であり、生活世界に存在するモノの三分の二を隠すことで、モノに関する情報の漏洩と物理的なアクセスを阻んでいる。他方で、見せることを前提に情報操作を行うこともある。あえて目に付く場所にモノを置き、アクセスさせることでケチではないという実績を作りながら、隠蔽しておいた残りを家族だけで利用するのである。

モノに執着する一方で必ずしも占有を意図しないという事実から、遊牧民はモノの所有には執着しないと言える。彼らにとって重要なのは、入用の際にモノが利用できるということであり、必要なモノが誰の所にあるかという情報である。モノは交渉によって入手できるため、全てを自らの所有にしておく必然性がないのである。つまり、本当に執着しているのはモノの情報であると言える。

キーワード：モンゴル遊牧民、モノ、所有権、交渉戦術、情報管理

- | | |
|------------------|------------------|
| 1. はじめに | 3.3 所有権と利用権 |
| 2. 遊牧民世帯における実態調査 | 4. モノをめぐる攻防 |
| 2.1 調査地および調査対象 | 4.1 モノの入手経緯 |
| 2.2 調査方法 | 4.2 入手のための交渉戦術 |
| 3. 遊牧民の生活世界にあるモノ | 4.3 防衛戦術とそのリスク |
| 3.1 内訳と特徴 | 4.4 防衛戦略としての情報管理 |
| 3.2 移動するモノ | 5. おわりに |

1. はじめに

モンゴルの遊牧民について紹介する一般書や雑誌の特集記事などで、素朴や純朴といった表現をよく目にする。「遊牧民はモノにあまりこだわらない。遊牧生活に必要な最小限の物があればいいのだ」、または「素朴ながらも豊かな暮らし」といった表現が一般的に定着しているようである（藤 1998: 142; 鮫島 2011: 12）。こうした表現の背景には、モノに執着せず、最小限のモノで満ち足りる術を知っている人々ならば清らかで素朴なはずだ、という解釈が潜んでいるように思われる。ではこのような解釈はどこからやってきたのだろうか。

モンゴルの遊牧に関しては、牧畜技術や遊牧民の生活様式などについて書かれた多くの先行研究がある。その中で遊牧民の生活の特徴づけるものとして、しばしばモノの少なさが指摘されてきた。1940年代におけるモンゴル遊牧民の物質文化について梅棹が「家財道具は比較的すくない」と述べているのにはじまり（梅棹 1991: 159）、「家財道具は非常に簡素」とであるというのが通説となってきた（小澤他 1992: 39）。本来は梅棹が「比較的」と述べている通り、我々の暮らしにあるモノと比べれば少なく見えるという意味であり、絶対的に少ないということではなかったと考えられる。しかしながら、モノが少ないという相対的事実の解釈が試みられる中で、遊牧民の移動性がとりあげられ、限られた居住空間を最大限に利用するための工夫であり、移

動を繰り返す遊牧生活においてモノの多さがその妨げになるからだという言説が一般化されるようになった。「遊牧に生きるモンゴルの人びとの生き方は、衣食住をはじめ生活のあらゆる部分から、徹底して余分なものを取り去ってしまうことに腐心したものの典型」であり、「いかに物を少なくするかが文化の基本」であるというのがそうした言説の一つである（鯉淵 1992: 39; 小澤他 1992: 41）。

このような言説における物質の量的側面が映像や紙媒体を通して強調された結果、相対的にモノの数が少ないという事実が必要最低限のモノしか持たないという解釈を生み出し、それが物欲の少なさという精神論に転換され、素朴でモノに執着しないといった幻想を創り出したのではないだろうか。相対的にモノが少ないから必要最低限のモノであるとみなし、物欲が少ないと考えるのはいささか躁急であろう。小長谷は、「たくさんにする」と「節約する」という意味を併せ持つモンゴル語の「アルビラハ」という動詞の説明を通して、他者からモノを奪うことで自分のモノを節約するという略奪経済の精神が現代の遊牧社会に息づいていることを指摘している（小長谷 2002）。筆者も物質の量とモノに執着しないといった精神性を強調して遊牧民を理想化する言説が、実態を表したものではないと考えている。

そこで本稿では、現地調査に基づいて得られた知見をもとに、モンゴルの遊牧民に対する一

方的な幻想を払拭し、彼らのモノをめぐる文化の実像を明らかにすることを目的とする。

2. 遊牧民世帯における実態調査

必要最低限のモノだけで心豊かに暮らしているといわれるモンゴルの遊牧民であるが、実際の生活はどのようなものであろうか。そもそも、彼らの生活世界にはどのようなモノが存在しているのだろうか。これまで、遊牧民の生活圏にあるモノの網羅的な調査は行われたことがなく、実態を把握するために悉皆調査を行った。

モンゴル国が市場経済化してから20年が経過し、草原に流通するモノの種類や量にも変化が生じていると思われる。調査では、そのような現代を生きる遊牧民の生活世界に取り込まれているモノを明らかにするとともに、それらのモノをめぐる日常のやり取りを観察した。

2.1 調査地および調査対象

調査は最も遊牧が盛んな地域の一つであるアルハンガイ県で行った。アルハンガイ県はモンゴル国中西部のステップを含む森林地帯に位置する、比較的降水量が多く緑豊かな土地である。ウシ、ウマ、ヤギ、ヒツジ、ラクダを含め337万9,200頭の家畜を有し、ウシとウマの頭数では全国1地位、ヒツジの数でも2位を占めている

(National Statistical Office of Mongolia 2008)。同県の南部に位置するホトント郡のサントと呼ばれる地域において（図1）、調査に協力してくれる遊牧民世帯E家を得た。

E家の家族構成は、サント地域で生まれ育った30代の夫婦と8歳と5歳の息子二人である。ウシ、ウマ、ヒツジ、ヤギを合わせ約200頭の家畜を有している。アルハンガイ県の保有家畜頭数を県内の遊牧民世帯総数（1万5,858世帯、2008年）で割ると、平均して一世帯当たり213頭の家畜を有している計算になる。従ってE家は県内でも標準的な遊牧民世帯であるといえる。

遊牧における家畜の世話は複数世帯で行うのが通常である。お互いの所有する家畜を合わせて一つの群にし、各世帯が日替わりで放牧に出かけることで労働の負担を減らすことができる。また、毛刈りや牧草刈りといった作業を共同で効率よく行うことができる。そのため、共同作業を行う二、三世帯は一所に集まって共営することになる。このような共営世帯は、季節の移動のたびに組み替えられる。春、夏、秋、冬と年4回の移動のたびに、共営する世帯の構成員が変わるのである。どの場所に移動するかは、降雨や草生えの状態によって各世帯が判断しており、どの世帯と共営するかは特に定まっておらず状況に応じて決定される。肉親や縁者が選ば



図1 調査地（筆者作成）



写真1 春の共営地。左から調査世帯E家、共営世帯A家、B家、T家（2010年6月撮影）。

れることが多いが、血縁関係の全くない世帯と共営することもよくある。

こうした社会関係のもと、E家を中心としながら往来の激しい共営世帯も含めて調査の対象とした（写真1）。さらに、共営世帯の構成員以外でE家にやってくる人々も考察の対象に含めている。

2.2 調査方法

E家4人の暮らす移動式住居ゲルに住み込み、生活圏にあるモノの悉皆調査、参与観察および聞き取りを行った。調査は2009年7月から2010年6月までの間に計4回、のべ3ヶ月にわたって実施した。

2.2.1 悉皆調査

遊牧民は季節ごとに宿営地を移動させており、それぞれ春営地、夏営地などと呼ばれている。移動のたびに住居であるゲルの解体と組み立てが行われ、その際季節に合わせた模様替えが行われる。気温の高い夏には通気性を優先し家具は少なく配置される。一方、寒さの厳しい冬には断熱性を考慮して室内は隙間なく家具で埋め尽くされる。家具の増減に従ってゲルの中で観察されるモノの量も増減するため、全てのモノ

を調査するためには一年を通じた観察が必要となる。E家の場合、模様替えや衣替えで一時的に不要となった家具や衣類を、夏営地と冬営地の中間地点に設置された木造の固定式物置小屋に保管している。このような保管物のほか、ゲルの外に置かれている家畜の世話に必要な作業道具についても、一点一点記録した。

2.2.2 参与観察と聞き取り

E家のゲルで寝食を共にしながら、家畜の放牧や搾乳、家畜囲いの清掃、家畜の搜索などを行い遊牧民の日常生活を把握した。家畜の世話だけでなく、他の家を日に何度も訪ねることも重要な日常生活の一部であることから、E家にやってきた客人とのやり取りやE家の家族が訪問した先の家人とのやり取りなどを詳しく観察した。また、悉皆調査で記録したモノ一点一点について、E家の家族から入手の経緯を聞き取った。

3. 遊牧民の生活世界にあるモノ

悉皆調査の結果、E家には373品目1539点のモノが存在していることが明らかになった。373品目の大まかな配置を図2に示した。ただし、これらの品目および総数は筆者が年間を通して確認しえたモノを網羅したものであり、定常ではないことを断っておく。また、家具の配置は2010年6月時点を参考にしたものである。

南東に面するゲルの戸口を入った正面奥には、嫁入り道具の長持が並べられ中央に仏棚が設けられている（写真2）。仏棚の左右にはE家に縁のある人々の写真を配置した額が飾られている。この正面奥が上座でありE家の顔となる。正面左の長持には、銀杯、銀細工のベルト、晴れ着、新品、現金などの貴重品が仕舞われ常に鍵が掛けられている。正面右の長持には使用頻度の低い雑貨や普段着、寝具が仕舞われており、鍵はあるが掛けられていない。長持の左右には戸棚がそれぞれ配置され、左側の戸棚には大量の端切れ、ハサミ、ナイフなどが、右側の戸棚には

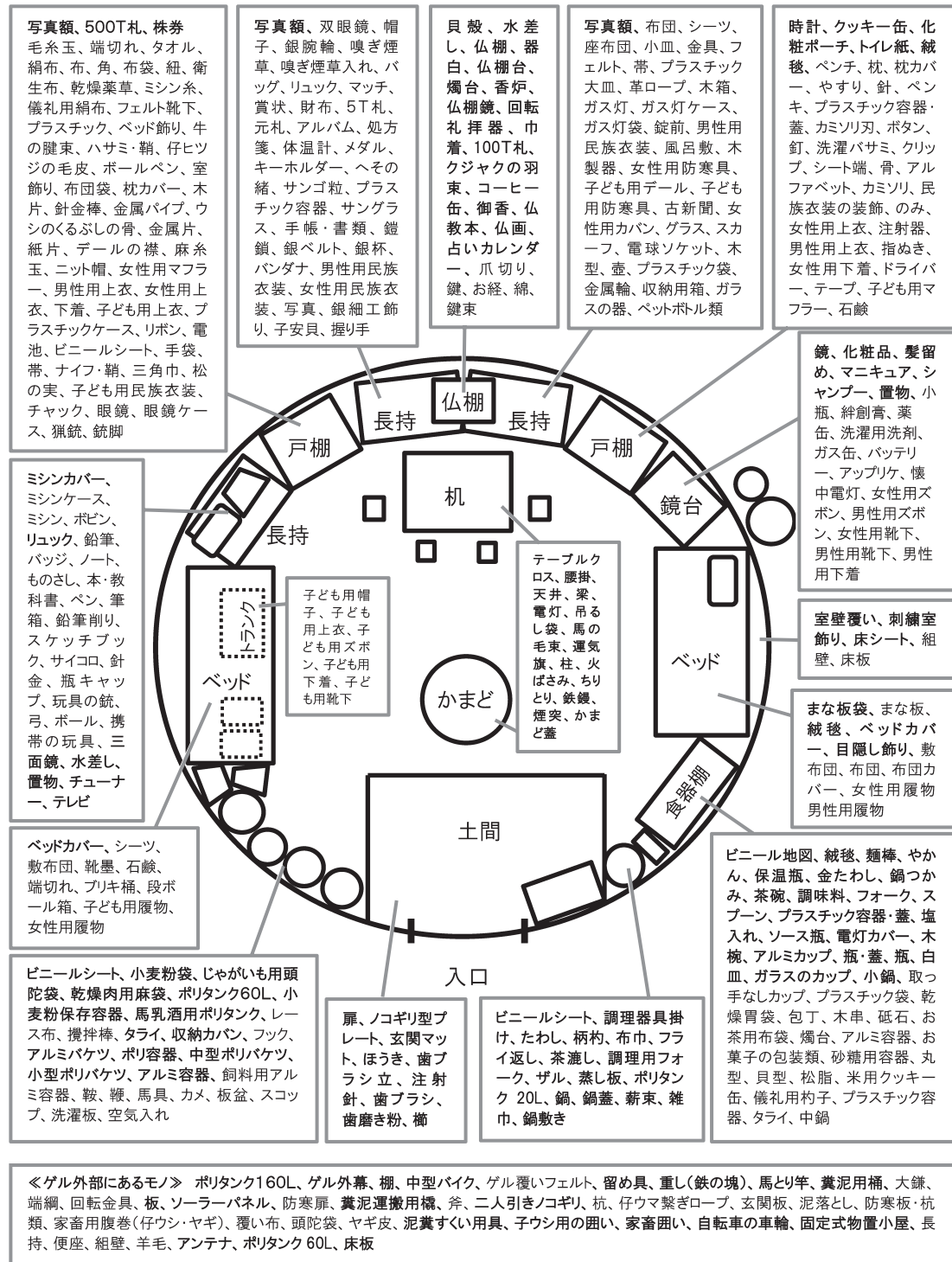


図2 ゲルおよび生活世界にあるモノ（春営地の家具配置より筆者作成）

夫婦の上衣、日中には枕が仕舞われている。

戸棚の上には、ペンキ、ペンチ、眼鏡、注射器、家畜用薬、クッキー缶などが並べられているが、額入り写真と時計によって視界が遮られ、クッ

キー缶以外は目に付かなくなっている。4つあるクッキー缶の中には釘、薬、ボタン、カミソリ刃など細々したモノが収納されている。

筆者が確認したところ373品目のうち、目視で



写真2 春営地のゲルの家具配置 (2010年6月撮影)。

きるモノはその三分の一程度であった(参照図2、杵内太字)。それ以外は家具の中や人目に付かない所に収納されている。

3.1 内訳とその特徴

生活世界にある1539点の内訳をみると、雑貨と衣類が多いことがわかる(図3)。雑貨22%には、枕カバーや歯ブラシ、化粧品、財布、アルバム、取り置きプラスチック袋のほか、マッチやトイレットペーパーなどの消耗品も含む。衣類の18%に次いで、調度17%となっている。調度というのは洗濯板、双眼鏡、ナイフ、懐中電灯といった身の回りの道具類のことであり、これに台所用具10%も含めれば、およそ三割を

日用道具類が占めていることになる。

書類・写真7%のうちの九割は写真が占めており、その数は100枚以上に及ぶ。その内の厳選された写真が額に入れられ、正面奥の座に飾られている。写真のほかには、家畜健康手帳や処方箋などがある。子ども用品5%のうち七割を占めるのが、ノート、教科書、筆記用具といった学用品であり、残りの三割をボール、瓶のふた、玩具の携帯電話、手作りの弓といった遊び道具が占めている。5%を占める家具のほとんどが、夫婦が結婚して独立したゲルをもった際に新調したものである。ゲル、かまど、ベッド、長持、戸棚、食器棚、机、腰掛などを夫側が、ベッド(木製)、鏡台、長持などを妻側が用意した。その他、生活の基本となる雑貨、調度、台所用具もそれぞれが分担して整えるのが習わしである。その後、家族の増加や生活設計に合わせて、寝具やソーラーパネル、テレビなどを買い揃えていく。

数は少ないが生活の重要な位置を占めるのが儀礼用具・仏具3%である。祭礼行事や贈答儀礼に欠くことのできないハダクと呼ばれる絹布や、仏棚に備えられた仏画、回転礼拝器、香炉、燭台などがこれにあたる。回転礼拝器の中にはお経が入っており、お経の巻かれた軸棒を日に何度も回すことで功德を積むというものである。これはE家だけでなく訪れた人々にも利用され

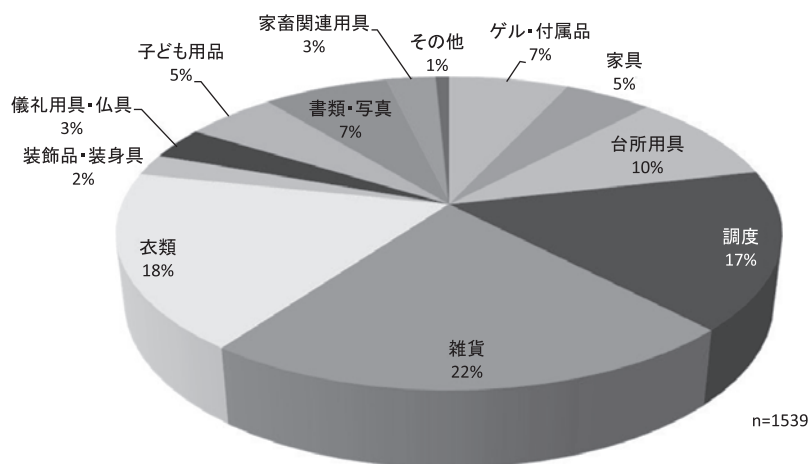


図3 生活世界にあるモノの内訳 (筆者作成)

る。その他1%には中型バイク、固定式物置小屋などが含まれる。

3.2 移動するモノ

四季を通してE家の生活世界で確認されたモノは373品目1539点であった。実際にはこれらのモノの数も内容も常に変動している。調査のたびに、以前はあったが今はないモノ、前回は無かったが今はあるモノの存在が確認された。日々の調査においても、昨日まであったモノが今日もあるとは限らないという状況であった。なぜならば、モノが移動しているからである。では、どのようなモノがどのような経緯で移動しているのだろうか。

ゲルや家具には季節の模様替えがあり、移動は必至であるが置き場所が物置小屋かゲルの中かという違いだけで、E家の生活圏内にあることに変わりはない。書類・写真と儀礼用具・仏具にも年間を通じてほとんど移動がみられなかった。これに対し、目立った移動が観察されたのが雑貨、調度、台所用具、装飾品・装身具および子ども用品である。

3.2.1 処分と貸与

E家の管理のもとに行われる移動には、処分と貸与の二つがあげられる。まず、処分についてであるが、これはさらに売却、交換、贈与、廃棄にわけられる。最も頻繁に売却されるのは家畜から採れる生産物である。毛皮などを行商の扱う雑貨や衣料品と交換する、あるいは現金に換えるといったことが行われる。また、個人の間で現金によるバイクの売買も行われる。贈与の対象となるのは、贈答品、小さくなった子どもの衣類やマッチなどの消耗品、急病人のための薬などである。贈答品としては酒と新品の衣料品が好まれる。廃棄に関して言えば、遊牧民が重視するのはモノの性能以上に実用性であるため、使えなくなったモノは即座に廃棄の対象となる。壊れた時計や割れた保温瓶、履きつ

ぶした靴など、モノの新旧によらず彼らが不要と判断したモノは次々に焼却処分され、生活世界から排除される。

処分よりも頻繁な移動をもたらすのが貸与である。貸与の対象は多様であり、期間もまちまちである。ここでは、いくつか貸与の事例をあげてみたい。

事例1

E家がヒツジの毛刈りを予定していた日の前日、4km程離れた所で別の世帯と共営しているB家の夫（E家の夫の兄、30代）がやってきてE家のハサミを借りていった。翌日E家の夫は、2km程先に宿営している知人のC家（以前に共営したことがある、40代）からハサミを借りてきて毛刈りを行った。（2009年9月9日）

事例2

E家夫人がウマの乳搾りに出かけている間に、共営世帯G家の夫人（親類縁者ではない、40代）がやってきた。肉用のまな板を貸してと言う。E家の肉用まな板の上には、刻んだ玉ねぎとじゃがいもの入った小鍋が置かれていた。G家夫人は、それらをE家の小麦用まな板の上に移すと、肉用まな板を持って行った。（2009年9月4日）

事例3

薪を切り出しに行こうとしていたE家夫人に手袋を貸してと頼まれる。E家夫人がいつも使っていた緑色の布手袋は、B家の夫人（E家の夫の兄嫁、30代）が持って行ったという。（2010年1月20日）

事例4

サントの中心街で催されるコンサートに向かうB家夫婦（E家の夫の兄夫婦）がE家に立ち寄った。E家に集まっていた人々は互いに、サントに行くのかと尋ねあっていた。E家の鏡台に座って化粧をしていたB家夫人が、「人前に入るのに、いいベルトない？」とその場にいる女性陣に向かって声をかけた。女性は全員ベルトを締めていたが、E家夫人は「ない」というように軽く首を横に振り、D婦人（E家の夫の姉）

は居合わせた女性陣の顔を見たあと、「あゆみ（筆者）のベルトがいいんじゃない？」とすすめた。B家夫人に「ベルトを貸して」と頼まれ、断る理由がなかったので貸すことにした。翌朝、街から戻ったという知らせを聞いたが、返しに来る気配がないので、B家の娘にベルトを取ってきてもらった。（2010年6月4日）

これらの事例に登場した、ハサミ、まな板、手袋の他にも、たわし、鍋、双眼鏡、懐中電灯、ミシン、プラスチック容器、櫛、髭剃りなどさまざまな雑貨、調度、台所用具が貸与の対象となっていた。借用の期間は定まっておらず、数分から数時間という瞬間的な場合もあれば、数ヶ月から数年にわたる場合もある。借りた人が返しに行くのが原則であるが、急な必要ができた場合には所有者が取り返しに出向くこともある。

また、事例1、事例3からわかるように、E家は貸与する側であると同時に借用する側でもある。E家はB家にハサミ、手袋などを貸す一方で、C家からハサミ、筆者から手袋を借りている。事例にはあげていないが、E家はB家から麺棒や帽子を借りており、G家からは、靴用ブラシ、柄杓などを借りている。E家にとってB家は親類、C家とG家は親類縁者ではないが、共営したことがある関係である。物理的、精神的な近さから共営世帯や親類縁者と貸借関係をもつ事が多いが、そこに限定されているわけではない。こうして、E家の生活世界には常に所有者の異なるモノが複数存在することになり、E家の所有物も他家に移動しているという状況が生まれるのである。

3.2.2 遺失と盗難

E家の管理の及ばない移動としては、遺失と盗難がある。放牧の合間に草原を渡って他家を訪問することが遊牧民の日課の一つである。特に男性の場合飲酒の機会が多くなるため、訪問先に帽子や携帯品を忘れてきたり、道中に落と

して来たりすることがよくある。発見した人が取り置いてくれたり家に届けてくれたりすることもあるが、手元に戻らないことも多い。稀な遺失の事例としては次のようなものがある。

E家の夫が長年大切に使ってきたお気に入りのナイフを知人男性に乞われて貸したところ、その知人が他界してしまった。このような場合、ナイフの返却を要求すること自体が憚られてできなくなるという。

また、ゲルの中にあるモノが盗難に遭うこともある。E家では、正面奥の家具の上に置かれていた双眼鏡が盗まれるという出来事があった。客人の出入りが多いため、誰がいつ盗んだかはわからないという。

3.3 所有権と利用権

移動の可能性は全てのモノに潜在しているといえるが、モノの中には、原則として家族以外に贈与してはならないとされているものがある。代々親から子へと受け継がれてきた銀杯、銀細工の革ベルト、銀の指輪、仏棚に供える燭台などである。また、文化的禁忌として貸借してはならないとされているのが、帽子とベルトである。モンゴル人にとって、信仰する天へと繋がる人の頭は神聖な部分であり他人が触れることは許されない。その頭上に被る帽子には所有者の気が満ちているとし、所有者の頭と同じように扱われる。それゆえ、帽子が地面や床に直接放置されるようなことはありえず、必ず家具の上に丁寧に置かれる。所有者の腹に巻かれるベルトもまた、魂がこもっているとされ、他人がこれを巻くと運命が狂うと言われる。

実際には、事例4であげたように、ベルトの貸借が行われていた。帽子についても、兄弟・親類間だけでなく、結婚式などの晴れの席には格好のよい帽子で出席したいと頼みにきた知人男性にも、E家の夫は自分の新しい帽子を貸与していた。しかし、彼らは文化的禁忌を軽視しているわけではなく、タブーであるという認識は

共有している。そのため、他人の帽子を被る前には帽子の中に唾をし、これは私のモノではないという印を天に示してから被る、という行動をとる。

このように、一見自由にみえるモノの移動の背景には、様々な文化的、慣習的な暗黙のルールが存在している。この節では貸借に関する慣習の原則と実態について述べる。

3.3.1 利用権

一部のタブーはあるものの、借り手は必要があれば誰にでも何でも要求する事ができる。所有者もその要求に応えるのが望ましいと考えられている。従って、貸与を求める者の必要性を凌駕するほどの正当な理由がない限り、貸し与えなければならない。借り手は貸与されたモノを自分のモノであるかのように自由に使用することが出来る。これを利用権と呼ぶことにする。所有権と利用権の決定的な違いは、処分権の有無である。借り手は存分に利用することはできても、それを廃棄したり第三者に贈与したりする事は許されていないのである。転貸も建て前ではしないことになっている。

所有者にとって貸与が贈与や廃棄と異なるのは、モノが手元に戻ってくることを前提としている点である。本来は、借り手が利用した後自ら返しに行くものとされているが、実際は利用後も手元において置くことが多い。所有者に入用がなければそのまま放って置かれる。必要が生じた場合には所有者が自ら、あるいは人を遣って取り返しに行く。この時、借り手が素直にモノを返せば円満な関係が維持されるが、なんだかんだと理由をつけて返そうとせず、手ぶらで所有者を帰した場合には緊張関係が生じる。その後、借り手がお礼の品を携えて返しに来れば再び円満に収まるが、どれほど催促しても返さない場合、「騙された」と言って所有者は貸与した相手を見限る事になる。この場合、貸したモノの回収は不可能に近くなる。

本来ならば、貸与されたモノを過失や故意で紛失、損壊した場合には同等のモノで償わなければならないとされている。しかしながら、現実には弁済される事は稀である。それゆえ所有者は、貸与するモノの価値（希少性、価格、思い入れ）や貸与相手との信頼関係など様々な条件を熟考したうえで、貸すか否かの判断を下すのである。

3.3.2 占有なき所有権

日々の生活では、特別な価値をもったモノよりも、雑貨、調度、台所用具の貸借が主となる。共営世帯の住人や親戚がふらりとE家にやってくると、出されたお茶を飲み雑談をした後、目当てのモノを借りて持っていく。あるいは、「何々ある？」と尋ねて、モノだけ借りて出ていく。E家の家族が他家からモノを借りる時も同様である。貸し出す側も顔色一つ変えず気前よくモノを渡している。その様子を見て筆者は、彼らはモノを出し惜しむという感覚とは無縁なのだろうか疑問を抱いた。人にモノを貸すことによって、自分たちに必要が生じた時に不便を感じたり、モノの傷みが早くなったりすることに対して、不満を覚えたりはしないのだろうか。

彼らは所有者として、貸与したモノが戻ってくる事を当然期待している。それゆえ、モノが戻っても貸与した時の状態と異なる場合、彼らにとって好ましくない変化が見つかった場合には、明らかな不快感を示す。調査世帯では、以下のような事例が見られた。

事例5

E家の夫人の櫛を共営世帯G家の夫人（親類縁者ではない、40代）が借りていった。家事の合間に、まだ櫛が戻ってきていないことを口にしてE家の夫人が、自ら出向いて取り戻してきた。持ち帰った櫛の歯に溜まった汚れを見て「汚い…」とつぶやいた。歯ブラシに石鹸をつけて汚れを落としながらも小声で「汚い…汚い…」と不満をもらしていた。（2009年8月24日）



写真3 60Lタンクにイニシャルを書きつける
(2009年9月撮影)。

事例6

E家が5km程離れた所に宿営する親戚のL家（E家の夫人の姉夫婦、50代）に貸与していた60Lタンクが戻ってきた。タンクを確認し、蓋とタンクを固定する金具が別のものにすり替わっていることに気づいたE家の夫が「金具は？」と尋ねた。L家の夫は「知らん」という。彼が帰った後、E家の夫は金具が違う事に対し、「締め具合の良い固定具だったからすり替えられたな」と不満を口にしていた。その後、「こうしておかないと危険なんだ」と言いながらタンクの腹と蓋と固定具に、ペンキで自分の名前のイニシャルを書き付けた。作業を終えると「これでもうすり替えられない」と満足げに語った（写真3）。（2009年9月7日）

これらの事例から、彼らは自分のモノに汚れをつけられたり、一部を違うモノにすり替えられたりすることを好まないということがわかる。モノを貸与することによって、貸した時と同じ状態で戻らないことがあるというリスクを認識しているのである。それにも関わらず、貸与を求められれば快くできる範囲で応じようとする。タンクに名前を書くということ自体が、モノの移動を大前提にした行為であるといえる。貸与した際に再びすり替えられる危険がないように

と所有権を主張しているのである。

遊牧民にとってモノを所有するということは、占有を意味しない。自分に差し迫った必要がなければモノが手元に無くても困りはしないし、必要が生じた時点で返却を求めるか、あるいは事例1のように、別の家から拝借すれば済むという発想が根底にある。遊牧民世帯には、1500点以上のモノが取り込まれていることをすでに紹介した。彼らが必要とするモノ全てを所有しているわけではないが、不自由もしていない。遊牧民にとっては、必要に応じてモノを融通し合うということが自然な行為なのである。

従って、遊牧民は貸与する側であると同時にされる側でもある。いつ何時貸与を求める側になるかわからないため、利用を求めてくる人を拒絶する場合にはそれなりのリスクを覚悟しなくてはならないのである。モンゴルでは一般的に貸借してはならないとされている帽子やベルトにいたっても、実際には貸借が行われているのが観察された。文化的禁忌やできれば貸したくないという所有者の思いも、希求者が現れた場合にはゆらぐことになる。最終的な判断は所有者自身に委ねられているのである。

4. モノをめぐる攻防

この章では、遊牧民がどのようにモノを入手し所有しているのかという事について述べ、実際に他の人が所有しているモノの譲渡や売却を求めようとする際にはどのような駆け引きが行われているのかを明らかにする。要求する側の交渉戦術、および所有者側の防衛戦略に焦点を当てる。

4.1 モノの入手経緯

遊牧民がモノを入手する主な方法には、作る、購入する、拾得する、貰うがあり、これらの方法で得たモノに対して所有権が認められる。物置小屋や家畜関連用具、簡単な生活用具など、山から切り出した木材や廃材、家畜の毛皮など

で作れるモノは何でも自作する。

作れないモノは購入する。購入先は、知人、行商、地元の商店である。時には100km程離れた地方都市や500km程離れた首都ウランバートルに出かけて買い物をすることもある。わざわざ遠方まで出かけて購入する理由は、大きな市場の方が品質もよく品数も豊富で、価格も安いからである。

街の路地や草原に落ちているモノは、基本的に見つけた人の所有となる。ナイフや帽子など文化的タブーで拾ってはならないモノもある。鍵束や携帯電話などの拾得物は実際に見つけた人の所有物として扱われている。

年中行事や遠来客の訪問などは、贈答の機会となり、贈られたモノは貴重品を収納する長持にいったん仕舞われたのち、共営世帯や親族の間で披露される。新たに生活世界に加わったモノを披露することで所有権の定着を図っていると考えられる。

このように様々な経緯を経て手元にきたモノに対して、所有者は少なからず愛着を持っている。労せずして手に入れたモノなどいうえ、入手にまつわる記憶が家族や友人との思い出としてモノに付与されているからである。

4.2 入手のための交渉戦術

他の世帯が保有するモノを必要だからただ寄せというのでは、交渉は成立しない。交渉する相手の立場や状況、性格や機嫌など様々な条件を考慮したうえで臨機応変に攻めていくことが必要である。所有権の移転（譲渡、売却）を求めて展開された多様な交渉戦術の中から典型的と思われる五つの類型を抽出し事例と共に以下にあげる。

4.2.1 質問型

事例 7

E家の親戚L家の夫（E家の夫人の姉婿、50代）がE家を訪れ、別の来客と会話中のE家の

夫に「薬あるか？」と小声で尋ねた。（2010年1月16日）

事例 8

共営世帯G家の夫（親類縁者ではない、40代）がE家にやってきて、筆者に対し「トイレの紙あるか？」と聞いた。（2009年8月26日）

この「〇〇ある？」という質問型は、「欲しい」や「くれ」といった直接的な表現を使わずにモノを手に入れようとする非常に一般的な要求法である。事例7の要求に対して、E家主人は「ない」と即答して来客と話を続けた。事例8で、G家の夫がE家の人々ではなく筆者に尋ねているが、これは以前同じ要求をした際に、E家の夫が「ない」と答えたことを反映している。実際には紙はあったが、E家の夫がそう答えた以上G家の主人には確かめようがない。そこで、紙を持っていることが明らかなうえ、断らないであろう筆者に狙いを定めたと考えられる。

4.2.2 説得型

事例 9

筆者が持参していた色鉛筆の缶ケースを見た共営世帯A家の夫（E家の夫の甥、20代）が、「俺にくれ」という。ケースだけ何に使うのかと尋ねると、「巻煙草を入れるのにぴったりなんだ」と答え、「この大きさ、この薄さがまさに煙草入れにぴったりなんだ、な、だからくれ」という。（2010年1月20日）

事例 10

筆者のハット帽を手に取り、じっくり調べていたE家の夫が、「こんな帽子を探していたんだ」という。「俺みたいな体の大きなやつには鍔の広い帽子が似合うんだ」と笑いかけ、「いくらで売ってくれる？」と売却をもちかけた。（2010年5月26日）

この類型は、所有者に対し要求者側の理屈で必要性を主張し、納得させた上で手放させると

いう遊牧民の常套手段である。理屈の筋が通っていてもいなくても、交渉相手にそうかもしれないと思わせることができれば、それで良いのである。所有者は納得してモノの移動に応じることになるため、後々所有権をめぐるトラブルになることが少ない。ちなみに、事例9では、色鉛筆を収める別容器との交換という事で手を打ち、事例10では筆者の言い値で売却した。

4.2.3 同情・方便型

事例 11

E家を訪ねてきていた男性Z（E家の夫の友人、40代）に対し、E家の親戚の若者O（E家の夫の甥、20代）が煙草をくれとしきりにねだった。Oは、座って話すZの側に座り込み、「もう一カ月も煙草吸ってないんだよ」と執拗に訴えた。（2009年9月9日）

事例 12

2km程先に宿営している知人C家の夫人（以前に共営したことがある、40代）がE家を訪れ、辛そうに肩に手をやり「肩こりがひどいのよ」とつぶやいた。（2009年8月29日）

事例 13

前年の夏に共営していたG家の夫人（親類縁者ではない、40代）がE家を訪れた。「うちの子がいいもの食べたいって言うてるのよ」と言いながらじっと筆者の目を見つめてきた。（2010年1月17日）

この類型はあえて相手に弱みを見せ、同情心をくすぐって目的のモノを入手する方法である。同情をひくための方便は真実でなくても構わず、仕方がないと相手に思わせることができれば成功である。事例11の一カ月云々というのは明らかに嘘だとわかるが、Zもそれを承知でそこまでせがむなら仕方がないという反応を見せた。この事例には続きがあり、OがZからねだった煙草を吸っていると、Zと一緒にE家を訪ねてきていたM（E家の夫の友人、男性、40代）が、今度はOにその

煙草をくれと言った。Oはかなり渋り、煙草が短くなるまで吸った後Mに渡した。

事例12では、肩こりがひどいという状況だけが提示され、一見何が要求されているのかわからない。C家夫人のこの発言を聞いたE家夫人が、無言で筆者の方に顔を向けたことで初めて、鎮痛剤を要求しに来たという事がわかった。事例13は、幼い子どものお願いという方便を利用した菓子類の要求である。草原ではアメやチョコといった菓子類は貴重品なので、誰もが心で思っているもなかなか口に出して要求できるモノではない。その場に居合わせた人々は呆れと期待の入り混じった顔でこちらの様子を伺っていた。

4.2.4 暗黙型

事例 14

夏休みで帰省していた共営世帯G家（親類縁者ではない、40代）の娘が首都に戻ることにになり、筆者が化粧をして送り出した。一部始終を見ていたE家の夫人が、筆者の目の前で開いていた筆者のカバンから化粧道具を取り出し、自身に化粧を施した後夫人専用の鏡台の上に道具を置いた。（2009年8月24日）

事例 15

新学期が始まるためE家の長男（8歳）を、夫人と次男と共に100km程離れた地方都市へ送っていった。二日ほどしてE家に戻ってみると、筆者が持参しE家と共同で使っていた目覚まし時計がなくなっていた。E家の家族によれば共営世帯G家の子どもが持って行ったのだという。数日間そのままにしていた筆者に対し、E家夫婦はしきりに取り返してくるようにと勧めた。（2009年9月2日）

暗黙型は交渉を経ずに、実際にモノを利用するという手段である。所有者が黙認することで成立する。逆に、所有者がモノを取り返すか、返すよう相手に促せば利用権は失効する。事例14では、鏡台の上に置きっぱなしにして、子ど

もや出入りする他家の大人に弄られたり持っていかれたりすることを恐れた筆者が回収した。ちなみに、E家夫人は自分の化粧道具を持っている。事例15では、E家に遊びに来たG家の子どもに、筆者が時計を持ってくるよう指示して回収した。

どちらの事例も対象のモノを回収してしまったため、利用者が一時的な借用のつもりであったのか所有権の移転を意図していたのかは確認できなかった。仮に、所有権の移転を意図する場合、黙って盗る泥棒行為と同一視される可能性がある。泥棒行為に対しては厳しい批判が向けられる。暗黙の利用か泥棒行為かを判断する基準は、モノの移動が所有者あるいは周囲の人の面前で行われたかどうかによる。

4.2.5 強請型

事例 16

E家の親戚で3km程離れたところに宿営しているT家の夫人（E家の夫人の兄嫁、40代）が訪ねてきた。T家の子どもの居場所をE家夫人に尋ねた後、E家の食器棚の中から調味料類を入れている器を取り出した。「これはどういうもの？」と言いながら、袋入りの調味料のにおいを嗅いでいたT家夫人は、馴染みの韓国製インスタントラーメンの調味料を見つけると、「余っていたら私にちょうだい」、「わかった？」と言って、それをまた元の位置に戻した。E家夫人は何も答えず家事を続けていた。（2010年6月6日）

事例 17

共営世帯A家（E家の夫の甥、20代）に同居しているN（A家の夫の父親でE家の夫の姉婿、50代）がE家を訪れ、筆者に首都までの交通手段を聞いたりしていた。Nは、おもむろに、カバンの上に置かれていた筆者の防寒帽を手にとると、「こんなやつで、頭頂部が革の帽子がほしい」と言った。「わかったな、見つけてきてくれよ」と言われ「へ？」という表情をしている筆者に向かって、「耳が隠れるやつな。耳が出る

と寒くてかなわん。凍る」と説明する。話を聞いていたE家の夫人が「その（筆者の）帽子はどうなの？」と口を挟むと、Nは「うん。これもいい。これでもいい」と言った。（2010年1月22日）

事例 18

共営世帯G家の夫（親類縁者ではない、40代）がE家にやってきて、筆者に対し「コーヒーおくれ」と言った。もう一つしかないからあげられないと答えると、「頼むよ」と言いながら胸の前で手を合わせて下から見上げる仕草をした。（2009年9月12日）

強請型とは、一方的に要求を相手に突きつけて飲ませようとする手法である。強引に見えるものの、強請された側が従わねばそれまでである。強請する側も、モノの所有権の移転に確実に成功するとは考えておらず、「とりあえず言ってみて成功すればラッキー」という程度の感覚のようである。

事例16の場合、一方的な言い分にE家夫人も内心ムツとしていたものの、後で自分の子どもを遣って、T家に調味料を届けさせた。T家とは行き来する機会も多く、普段から世話になっている兄嫁という相手の立場に、E家夫人が配慮したためである。要求が受け入れられるかどうかは、普段の人間関係が重要となってくる。

事例17がその好例である。E家の夫の姉婿とはいえ、筆者とはそれほど親しい間柄ではなかったため、Nが筆者に対してモノを要求してきたことに戸惑いを覚えた。E家夫人の合いの手も、Nに加勢するためというよりは、早く話を切り上げさせようという空気を含んでいた。結局、筆者は話を聞き流すことにし、帽子は渡さなかった。

事例18は「くれ」、「頼む」という非常に率直な懇願の形をとっており、珍しい事例である。また、コーヒー一杯に対して大仰であるという状況を意図的に作りだし、周囲の笑いを誘いながらのおねだりであるという点も特徴的であ

る。筆者も笑ってしまったので、なけなしのコーヒーを譲った。

以上にあげた五つのタイプのほかにも、たまたま交渉の場に居合わせた第三者が交渉が上手くいくよう横合いから口をはさむ、にわか**連携型**のような事例、相手の所有物を褒めちぎったうえで交渉に持ち込む**賞讃型**、所有者に対して「それを〇〇したらどう？」と勧める体面を装いながら自分に有利な方へ誘導する**提案型**、「それをくれないなら…」と圧力をかける**強迫型**などが観察された。

また、攻勢をかける側の興味深い特徴として、実際には対象のモノを保有あるいは所持しているにも関わらず、他人のモノを要求する場合があることがあげられる。特に、煙草やマッチといった消耗品でよく観察される。その理由は、自分のモノを減らしたくない、温存したいという欲求にあるようである。借用を求める際にも、似たような状況が観察された。帽子、ハサミ、ナイフなど、自分も保有しているモノをわざわざ借用するのである。その理由は、帽子の場合「自分のものが雨に濡れるのが嫌だから」であり、ハサミやナイフの場合は「よく切れる方がいいから」というものであった。

4.3 防衛戦術とそのリスク

必要なモノを入手するために様々な戦法を駆使して交渉することは、遊牧民の日常であり特別な行為ではない。しかし、相手に言われるがまま全ての要求に応じては生活を維持することができなくなる。自分や家族の生活を守るためには、所有物を周りの人々の要求から守っていかねばならないのである。だからといって、ただ断れば良いというものではない。広大な原野で生きていくためには周りの人々との持ちつ持たれつの関係が何より重要であり、自分の資源だけを確保するような独り勝ちは人の心を離れさせてしまう。この節では、遊牧民が周囲の要求からどのように所有物を守っているのか、

また要求を断ることにはどのようなリスクが伴うのかについて事例を通して明らかにする。

モノの利用権および所有権の移転を拒否する戦術の中で、一般的によく使われるのが**存在否定型**である。その他に、あれこれともらしい理由を付けて断る**理屈型**、自分のモノの代わりに別の人のモノを利用するように勧める**代替型**などが観察された。

4.3.1 存在否定型

事例 19

E家夫人が100km程離れた地方都市の市場で購入した、粒状の殺蠅剤をゲルの中で使用していた。そこへ、3km程離れたところに宿営するH家の夫人（E家夫婦の友人、30代）が訪ねてきた。殺蠅剤のまわりに大量の蠅が死んでいるのを見て、H家夫人が「多めに買ってないの？余ってるのあるんでしょ？」と尋ねたところ、E家の夫人は「なくなった」と返答した。（2009年9月3日）

事例 20

E家の夫人がゲルの掃き掃除をしていると、共営世帯G家の夫（親類縁者ではない、40代）がやってきて「タライはあるか？」と尋ねた。E家夫人は「ない」と即答したが、立ち去らずにいるG家の夫を振り返って「何に使うの？」と聞き返した。彼が「頭を洗おうと思って」というのを聞くと、ベッドの下に仕舞っていたタライを取り出して渡した。（2009年9月8日）

この存在否定型は、一言で要求を退けることが可能な汎用性の高い戦術である。本当にかい実はあるが「ない」と答えているのかを他人が判断するのは困難であるため、「ない」と言われれば引き下がらざるを得ないからである。事例19の場合、実際には殺蠅剤は使い切られておらず、H家夫人の目の届かない場所に置かれていた。しかし、まだ使用する必要があったため、E家夫人は存在を否定して守りに徹した。事例

20では、E家夫人は掃除中で手が離せず、一旦はないということにして断ろうとした。しかし、共営世帯G家にはタライの存在も置き場所も知られているため、仕方なく手を止めて要求に応じた。

4.3.2 理屈型

事例 21

筆者が所用で携帯電話を借りにE家の親戚T家（E家の夫人の兄夫婦、40代）を訪ねたところ、「放牧に出ているSが戻るまで待ちなさい。Sが戻ったらそのウマと一緒に電波のある場所へ連れて行ってもらうといい」と言われた。1時間ほどしてS少年が戻ってきたが、外は大雨になった。すると「雨と風で電波がなくなってしまったから無理だ」、「雨が止むまで待つか？」と聞かれ、結局借りることはできなかった。（2009年8月28日）

理屈型では、風雨で電波がなくなるといった理屈の内容が重要なのではなく、理屈を付けているということ自体が要求を退けようという意思表示であると理解される。譲渡あるいは貸与する意思がない、と直接伝える代わりに様々な理由を述べるのである。他方で、理屈の内容が重視される場合もある。肉親の形見や友人からの贈り物、家族の思い出の品など特別な思い入れのあるモノについては、率直に「そういう大切なモノだから誰にも貸したり譲ったりできない」と伝えることで、要求を退けることができるとされている。

4.3.3 代替型

事例 22

筆者が共営世帯G家（親類縁者ではない、40代）からウマを借りて出かけようとしたところ、G家夫人が「そんな年寄りのウマを…」と言って止めた。4km離れたB家（E家の夫の兄、30代）へ遣いとして自分の息子を別のウマで走らせ、

B家に筆者のためのウマを調達させた。（2009年8月24日）

この事例の貸借の対象はウマである。普段はG家の息子が乗っているため、年寄り云々は理屈であり、貸したくないという意思表示であることが伺える。B家のウマを差し出すことで、筆者の要求を満たしたうえに自家のウマの温存を図ったのである。

モノでも代替型は見られる。3章であげたベルトの事例4のように、誰かがモノを求めてきた際、当人は是とも否とも言わず、その場に居合わせた人を促して要求に応えるように仕向けることがある。

温存するため、あるいは面倒くさいなど様々な理由で相手の要求を退けることもある遊牧民だが、表向きはあげる（貸す）気はあるが、モノが「ない」から仕方がないのだという体裁を崩さない。なぜならば、「ない」という正当な理由なしにモノを分け（貸し）与えないことは大変な悪徳とみなされるからである。

先ほどあげた事例22には続きがある。一部始終を見ていたE家夫人が声を潜めて「ウマをけちって別の家のウマを取りにいかせたのよ」と筆者に言った。ウマをけちるとはどういうことかと尋ねると、自分のウマに乗られるのが嫌でウマを人に貸さないことだと答えた。また、次のような事例があった。

事例 23

ある夜、親戚の若者が酔っぱらった状態でE家を訪れ、酒を要求した。しかし、E家夫人がそれを拒否すると、ごねてくだを巻いた揚句「あんたは、ハラムチだ。あゆみ（筆者）はちゃんにご飯も食べさせてもらってないんじゃないのか？」と夫人を中傷して出て行った。それを聞いた夫人は憤慨し、翌朝の搾乳時にも共営世帯G家の夫人に「ハラムチといわれた」という怒りの報告をしていた。（2009年8月23日）

この「ハラムチ (qaramch)」とは「物惜しりする者、ケチ」という意味であり、分け与え合うことを当然とする遊牧世界において「欲張り」を意味する「シヨナハエ (shunaqai)」と並ぶ悪徳であるとされる。遊牧民にとってケチと中傷されることは大変不名誉なことであり、一家の面子に傷がつくと考えられている。

求められれば応じるというのが遊牧世界の原則であり、断るからには相手がぞんざいにあしらわれたと感じないよう、何らかの理屈を述べ立てなければならない。納得させることができなければ、場合によってはケチという誹謗中傷を受けることになる。また、単に中傷されるだけでなく、自らがモノを要求する立場になった時に不利に働く可能性もある。それゆえ、できるだけケチという悪評が立たないようにするために、応じる気はあるがモノがないという存在否定型が多く使われていると考えられる。

ただし、今日の前にあるモノや直前まで相手の目に触れていたモノなど、その存在が明らかにも関わらず否定型を用いた場合には、「嘘つき」という批難を受けることになる。そのため、相手と状況に応じて戦法を変えることが必要である。

4.4 防衛戦略としての情報管理

頻繁にこのようなモノをめぐる駆け引きを行う遊牧民だからこそ、少しでも自家の資源を温存し、なおかつ円滑な人間関係を維持するための徹底した工夫を日常生活の中にとりいれている。その一つがモノの隠蔽である。3章で述べたように、一世帯の生活世界には1500点以上のモノが存在しているが、その多くは家具の中や人目に付かない所に収納されており、見えているモノは全体の三分の一に過ぎない。戸棚や長持の中に仕舞われたモノを家族以外の人間が見ることは基本的にできないため、要求を「ない」といつて断られてもその真偽を確かめる術はない。したがって、存在否定型が成立しうるのは

このような隠蔽工作が行われているからに他ならない。

また、隠蔽には見せないだけでなく、物理的にモノにアクセスさせないという重要な働きがある。遊牧民の家に置かれている家具は、どれも蓋や扉を閉めれば手を入れる隙間のない完全密封型である。施錠の有無に関わらず、家族以外の人間が勝手に家具を開いて収納されたモノをとり出すことは泥棒行為とみなされる。しかし、家具が開いていたり、家具の上にモノが置かれているような場合には、家族以外の人間が直に手に取ってモノを調べたりすることが許容される。E家の盗難に遭った双眼鏡も戸棚の上に置かれており、不特定多数の人間のアクセスが可能であった。

カバンや箱などの収納も同様で、チャックや口が開いていれば、覗かれたり取り出されたりしても仕方がないとされている。他人の持ち物を調べることを、遊牧民の間では「掘る」を意味する「オハハ (uqaq)」と呼んでおり、中に手を入れて次々取り出しては性能や用途を確かめる。一度目にしたモノの情報は全て蓄積され、必要が生じた時には所有者の所へ出向いて「○○ある？」と尋ねるのである。E家では筆者の持ち物が掘られないように、人が来ることがわかっている時には「大事なモノは隠せ」、「カバンに仕舞え」、「カバンの口も閉めておけ」という忠告がなされていた。

要求されたくないモノは人目に付かないようにようにして守っているということの裏を返せば、全体の三分の一に相当する見えているモノというのも、実は意図的に見せているモノという事になる。毎日入れ替わり立ち替わり、共営世帯、親類縁者、知人の訪問を受ける遊牧民の住居内は整然としている。いつ来客があっても良いように、一日に2度、3度と掃除をし、出されたままになっているモノをあるべき場所へ逐一戻している。人が来ること、人に見られることを常に意識しているため、日中使用しないモノ

ノは家具の中へ仕舞う。家具に入りきらない布団は、きれいに折りたたんで鮮やかな刺繍の施された目隠しで覆っている。美しい模様の描かれた家具や写真額、置物などの装飾品で室内を演出しつつ、訪問者に見せるモノの種類や量をあらかじめ調整しているのである。

それゆえ、訪問者が見て要求することを想定して、モノの量や位置を操作することもある。マッチや調味料などの消耗品でよく見られる。目に付きやすいガラス張りの食器棚の中、戸棚の上などにモノの一部を置いておき、それを要求者に分け与え減っていく様子を見せるのである。こうすることで人々の要求に応えたという実績を作りながら、隠蔽しておいた残りのモノを家族だけで利用することができるのである。たくさんある時は気前よく分け与え、残りが少なくなってくると「もう人にあげるのはやめよう」と言ってみえない場所へ仕舞う。独り勝ちしないよう、しかし、家族が十分生活できるようバランスを考え、徹底したモノの情報管理を行うことが防衛戦略の要なのである。

5. おわりに

悉皆調査によって、現代を生きる遊牧民の生活世界には373品目1500点以上のモノが取り込まれていること、それらのうち雑貨、調度、台所用具が世帯の間を頻繁に往き交っていることがわかった。373品目1539点というのが多いか少ないかは相対的なものであり、ここではさほど重要ではない。むしろ、所有物が所有者の下を離れて動き回ることがモンゴルの遊牧世界の特徴であるといえよう。

このように述べると遊牧民がモノに執着しない人々のように思われるが、実際はそうではない。自分の労苦によって手に入れたモノを自分の家族だけで利用したいと考えるのは自然なことである。遊牧民も例外ではない。事例14と事例22で示されたように、できれば他人のモノを利用し自分のモノを温存したいと考えている。

また、機会あらば人の持ち物を掘ろうとし、モノの情報を収集しようとする彼らの言動は、モノに対する並々ならぬ執着を示している。モノに執着しないという誤った認識は改めるべきである。

しかしながら、モノに対する執着を見せる一方で、希求者が現れれば求めに応じようとするのも事実である。なぜこのような一見矛盾したような現象がおこるのだろうか。筆者は、占有意識の希薄さが関係していると考える。遊牧民の間では、モノと所有者が正確に記憶されており、所有権は確固たるものとして認められている。だが、それはモノの独占を意味しない。所有権を楯に、「私のモノだからあげない、使わせない」という理屈は通用しないのである。ゆえに、事例21と事例22で取り上げた、断りの儀礼とも言えそうな理屈を並べる戦術が必要とされるのである。また、事例6を見ると、モノが所有者のもとを離れ、求める人間のもとへと移ることが自然の成り行きだと捉えられていることがわかる。このような、占有意識の希薄さが、モノへの執着と交渉によるモノのやり取りの両立を可能にしていると思われる。

モンゴル遊牧民のモノをめぐる実践は、他者との駆け引きである。彼らの世界を理解するためには、我々の所有権についての固定観念をひとまず脇へ置いて、モノの流動性に着目しなければならない。遊牧民が最も関心を寄せる、誰がどんなモノを持っているのか、誰から誰にどうやってモノが渡ったのかといった情報の中に、文化を読み解く鍵があるのである。また、調査の限り、遊牧民は清貧で素朴であるというイメージも当てはまらなかった。むしろ、情報管理と交渉能力に長けた策士と言った方がよいであろう。

今後、研究の焦点をモノからモノに付随する情報へと転じれば、モノを情報として取り扱う遊牧民の姿がより鮮明に浮かび上がってくるだろう。

参考文献

藤公之介

1998 『モンゴル大草原101の教え』 東京：一満舎。

鯉渕信一

1992 『騎馬民族の心—モンゴルの草原から』 東京：日本放送出版協会。

小長谷有紀編著

2002 『遊牧がモンゴル経済を変える日』 大阪：出版文化社。

National Statistical Office of Mongolia

2008 *Mongolian Statistical Yearbook 2008*,

Ulaanbaatar.

小澤重男

1972 『現代のモンゴル—草原と砂漠の国』 東京：日本交通交社。

小澤重男・鯉渕信一

1992 『モンゴルという国』 東京：読売新聞社。

鮫島和男

2011 「モンゴル、ウランバートル 遊牧民に
出会う、草原の休日」『VISA』 459: 12–
29。

梅棹忠夫

1991 『回想のモンゴル』 東京：中央公論社。

The Illusion of Non-Attachment

Negotiation Strategies over Material Things in the Mongolian Nomadic World

HOTTA Ayumi

The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies,
Department of Regional Studies

This article aims to clarify the place of material things in the Mongolian nomad's world. It does not rely on the discourse about nomadic values, which has held that nomads make do with the bare minimum and are not attached to things, but rather it is based on findings acquired in field work. In an exhaustive survey conducted in Arkhangai Province, I found that a nomadic household possesses a considerable number of material things—1,539 items of 373 different kinds of things. Further, I found that things have an existence that goes beyond the sphere of everyday life, and they change hands frequently by means of transfers and loans. Possession of things does not always mean continuous custody. Nomads may keep at hand an item that they have borrowed even after they have finished using it, until the owner comes to take it back. Nomads usually think that they do not have to be surrounded by their things all the time. It is only when they need a particular thing that they think they should either ask for its return or go to borrow the item from another house.

However, nomads occasionally resort to fierce tactics when they demand or request transfers or loans. Both the owner and the requester assert themselves in various types of negotiation. If the owner refuses the request, there could be a risk of causing a future refusal of their own demand. Thus it is extremely important to try to seek and reach a compromise by negotiation. As a strategy to push negotiations forward to one's own benefit, efforts at concealment and information control are often part of the process.

We can say that nomads are not deeply attached to possession of things, from the fact that their strong attachment to things does not always mean having concrete custody of them. The most important thing for Mongolian nomads is information about where things are. It is this information that allows them to negotiate with others and brings a chance to obtain the things that they need. That is to say, they do not have to keep things around them at all times. In conclusion, it can be said that it is information about things, not things themselves, that nomads are deeply attached to.

Key words: Mongolian nomads, ownership, possessions, negotiation tactics, information control